

『思い思いの若者たち』

「少子化の世に、なぜ〈子どもの受難〉が増え続けるのか」

法人理事 布袋 太三

「児童虐待」や「不登校」「いじめ」の件数が増え続けていることはよく知られているとおりだが、このところは「十代の自傷・自殺」などの件数も増えはじめているという。また「漠然とした孤独感」とか「急な意欲の減退」などを訴える子どもの精神科受診が急増し、評判の児童精神科医の元には数カ月待ちでやってくる少年少女たちがあふれていると言われている。そして先日には「小中学生の発達障害 8.8%」や「コロナ禍と子どもの貧困」などの見出しがほとんどの朝刊に踊った。

これは一体どういうことなんだろう。今の子どもをめぐる状況に何かが起こりはじめているのだろうか。

これらについての専門家たちの話も何とも歯切れがよくない。おそらくは実態の分析のとっかかりのところでハタと戸惑う事例があまりにも多いのだと思う。

それほど現在の「子ども事情」は未知の領域に入り込んでいるのかもしれない。

周知のとおり、悲惨で寄り添えない「虐待」を体験させられた子どもはその成長や発達に複雑な負の影響を受け易いとされているし、「不登校」や「いじめ」の周囲の不適切な対応は当事者を後年再び困難な心理的・精神的課題に直面させてしまうとも言われている。

要するに、子どもの〈受難〉は一過性でなく生涯にわたって引きずる深い心の傷となることが多いということだ。

ところで、こうした困難に見舞われる子どもたちが近年なぜこんなにも次々と出てきてしまうのか。即答は難しいが、現代の社会的風潮とか人間関係づくりの傾向などと深く関わりあっていることは否定できないと思う。

私はそもそも現代のようなスピードと効率優先の社会はどうしても非人間的で過剰な抑圧システムを根底に持たざるをえないと思っている。そして、おそらくそのシステムはホッコリとした穏やかな普通の人間性などは易々と壊してしまうだろうし、同時に一部のよりビュアな子どもの耐性や精神の成長を緩慢にだが蝕み続けていくとも思っている。

だから現代の子どもの受難は一人悪魔的な大人の所業のせいではなく明らかに社会的に産み出されたものということだと思ふ。

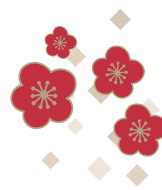
もし子どもの受難が現代社会の不可避的な産物なら抜本的な社会変革抜きには解決できないことになってしまうが、たとえ対症療法に過ぎなくても、少しの改善でも私たちは今何らかの手立てを講じるべきだと私は思う。

そこで、私は現在の子どもたちを最前線で見ている先生や関係機関の人々に今一度政府に向かって声を挙げてみてほしいと思っている。「現場の先生の数を増やす」とこと「スクールカウンセラーの全校配置」の早期実施を必死で迫ってほしいのだ。予算措置も比較的安価で済むし、この二つが完全に実施されると状況はかなり必ずや好転する。

子どもの様子はより丁寧に見守られるはずだし、教師も含めて学校全体のメンタルヘルスは目に見えて安定していくにちがいない。

私は学校の先生こそはこの受難にあえぐ子どもたちの大いなる助け手になるはずだと思っている。だから今こそ知恵と気合いで何とかしてほしいと切にお願いしたい。

最後に、少子化を嘆く政治家たちには、今こそ今を生きる子どもや若者たちを徹底的に大事にする施策に精一杯の予算を注ぎ込むべきではないかと強く言いたい。



あづまプラッツが 引っ越しました。



ひきこもり支援ステーション事業「あづまプラッツ」は昨年12月に、新宮市千穂に引っ越しました。

同じ建物の2階部分に厚生労働省事業「南紀若者サポートステーション」の新宮サテライトが入っております。アットホームな雰囲気、部屋数も多くゆったりとしています。

お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。



事務所



レジャークラフトコーナー



居場所
(ものづくりなど)



調理実習コーナー



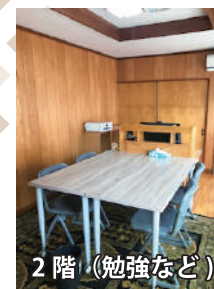
居場所
(テレビ鑑賞など)



相談室



2階 (サポステ)



2階 (勉強など)



玄関
(プラッツお知らせボードとサポステ案内看板)